

故大和田国男氏の作品

7号掲載

『ネイビー スピリット』

会員 大和田 国男

敗戦で何もかにも失った日本が、焼野ヶ原から立上がり、産業を復興して今日の繁栄をもたらしたのは、人材が残っていたからだといわれている。なかでもネイビー（海軍出身者）は活躍している。

政官産の各方面で、海軍各科士官（主計科、法務科、技術科等）出身者が多数活躍している。海軍は戦時中、優秀な大学高専卒を大量に採用して人材を温存したからだ。

そして、これらの人達が活躍した根底には、僅かな期間ではあったが、在任中に体得したネイブีสピリット（海軍精神）があったからだと思う。このネイブีสピリットは今の世にも通ずるし、ハート（心）の会にも通ずるものがあると思うので、ここにその一部を紹介する。

- (1) 「スマートで目先が利いて几他面 負けじ魂これぞ海軍（ふなのり）」と海軍士官を表現した歌があるが、このスマートとは「訓練を尽くし準備が完了した時の余裕のあるすがすがしい姿勢」を言う。
- (2) 「センス オブ ユーモア」厳しさの中にも精神的余裕が必要、ウィットなければ士官の資格なしと言われた。
- (3) 指揮官先頭トップは常に先頭に立って、情勢を判断して指揮をとり、全ての責任をとる。
- (4) 率先窮行 人に先立つて自ら行うこと、人に模範を示す率先垂範とは違う。
- (5) リーダーシップとは徳性なり 勇者の勇猛より王者の仁慈。心底に「なさけ」「思いやり」をもつ愛情が必要。
- (6) 周囲に明るい空気を漂わせる トップが明るさば職場は自然に明るく、エネルギーとなり成績は上る。要は仕事を楽しむことだ。
- (7) 仕手の根元は責任感と決断力 それを支える体力、気力、能力を常に養え。
- (8) 功を部下に譲り部下の過ちは自ら負うべし 部下統率の機微なり。
- (9) ワングラスで評価するな 一面的見方で人を評価するな。誰にも長所は必ずある。
- (10) アイアン/バーになるな フレキシブルワイヤーたれ、頭の固いやっになるな、柔軟な考えの出来る男たれ
- (11) 縁の下の力持ちたれ 犠牲的精神を発揮し何事にも骨惜みするな。
- (12) 不関旗（ふかんき）を掲げるな 気に入らないからといって「我れ関せず焉（えん）」の態度をするな。
- (13) 出船の精神 常に次の行動に出られるよう準備しておけ。
- (14) 5分前主義 行動開始5分前には一切の準備が終わり、時間がくれば直ちに行動開始出来るように。このためには5分前の5分前が必要。
- (15) 最後の5分 最後の最後まで希望を捨てずに粘れ。
- (16) 食食は常に感謝の念が必要。
- (17) 敬礼は相手に対する敬意と感謝の念を込めよ、答礼は誠意をもってせよ。

以上ご参考になれば幸である。

（工学博士、(株)蔵前工業会前理事長、元(株)不二越社長、元海軍技術大尉）

地球上の人口は増加の一途を辿り、現在の58億人から2020年には83億人、2050年には98億人に増加するという。これら膨張した人口の生活を支え、経済的発展を求めするには、地球環境の容量は限界に達する恐れがある。

なかでも食糧同額は深刻だ。地球上には様々な農業の問題がある。耕作面積を始めとする土地問題、地球の砂漠化、地力の疲弊、森林の減少（水害のもと）、水資源の不足など農業に立ちはだかる間違は山積し、食糧供給は行き詰まる可能性がある。

特に日本の農業は自給率42%と先進国中最も低い。将来とも外貨を十分に保有出来るとは限らないし、世界の農産物が逼迫したら、海外よりの供給は途絶する。冷汗三斗の思いだ。

一方、生活程度を高める経済成長は、相応の資源・エネルギーを必要とする。特にエネルギーの大半を占める化石燃料は有限であるし、未だに有力な代替エネルギーは現れていない。資源の枯渇も叫ばれて久しい。これらは食糧問題と共に、21世紀最大の開題となることは必至といえよう。

そして、経済成長の結果は「ツケ」を環境破壊・汚染に回してくる。地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨、大気汚染、海洋汚染などの公害は、地球環境を痛めつけ、地球はこれ以上経済成長を支え切れないと益々悲鳴をあげてくる。

また、資源のある貧しい開発途上国から、豊かな工業国が資源を搾取して、21世紀には地球上の貧富の差をさらに激しくする。

北朝鮮がよい例だ。冷戦後ロシアから石油が入らなくなり、森林を伐採して薪にした。また、中国からの食糧を木材でバーター取引したため、国内の山は丸裸となって水害が多発、その結果農業は疲弊し飢饉を招いたのだ。環境破壊が国を貧しくする（亡ぼす？）よい例だと言えよう。

このように21世紀には、幾多の困難な問題が世界的規模で複雑に絡み合い、溢々深刻化することが予想される。とりわけ我が国は、国土が狭隘で、天然資源に乏しく、食糧事情にも恵まれないので、科学技術の正しい発展が未来を切り拓くことになる。そして、世界の科学技術の発達に寄与し、人類社会の持続的発展に貢献することが、科学者・技術者の務めになる。

科学技術が人類の幸せを求めることを究極の目的とするならば、科学技術に携わる人は、人間的な視点に立ち、心の底から感動をもって独創的な発想をすることが求められる。

言いかえれば、これからの技術者は、広い視野をもち、異なる視点から眺め、思いやりのある心豊かな感性（ハート）の持主でなければならない。

現在の学閥は、多くの専門分野に細分化されているから、狭い視野と独特の価値観のもとに、それぞれの領域内の限られた研究が進められている。このような現況のもとでは、来るべき21世紀の、限りなく広範で複雑な事象の研究を創出することは難しいのではなからうか。

そのためには、学問を統合化・総合化して、前述の感性豊かな研究者によって研究が進められるべきであろう。これが私の主張なのだ。

例えば、地球環境問題を捉えるならば、幾多の専門に細分化されている。地球物理学、気象学、地質学、海洋学に、理学、工学、農学、生物学、医学等々、実に多岐にわたっている。これらの学門の集合化・総合化が行われて始めて問題解決が出来るのではないか。

高齢化社会の同額にしても、保健、衛生、医療、介護などと、理学、工学、社会福祉学が組んでシステム化し、例えば高齢化社会工学のような形にして進めるならば、根本的な解決につなげ得るのではなからうか。

さらに、公害・資源有限の見地から、電力における化石燃料からクリーンエネルギーへの転換、自動車のガソリン（灯油）から電気（電池）自動車への移行なども、総合科学的に捉える必要があると思う。また産業廃棄物の出ない、リサイクルの出来る「モノづくり」に向けての研究も総合的に取り上げる必要があると思うのだが。

科学技術の進歩が、単なる速さの競いであつたり、便利さの追及であるならば、公害のばら撒きとなつたり、資源のムダ使いになる恐れがあるし、有効に使えば多大の効果のある遺伝子工学、核分裂、コンピューターリテラシーも悪用されれば、人類を暗い谷間に追いやることになる。したがって科学者・技術者は倫理的・人間的・美的価値観を有する感性志向の国際的感覚が必要となる。

我がHEARTの会は、人間と環境問題を真剣に考える同憂の志の集りであり、異なる分野の人々が、『21世紀の重要課題』を総合的に探求する提案集団だと思う。今後の活発な活動を期待し発展を祈るや切なるものがある。

22 号掲載

会員ニュース

戦後(株)不二越で「モノづくり」一筋に挺身され、経営者となってからも現場主義を貫いた、本会相談役の大和田国男さんが、このたび、日本設備管理学会誌に3年ほど連載した、「モノづくりと人」をまとめた著作、「技術屋社長の回顧録」『モノづくりよ永遠なれ』を日本プラントメンテナンス協会より発行されました。(定価：本体1・500円)

“天然資源に恵まれない日本が、21世紀を生き抜いていくためには、日本人一人ひとりがあらゆる知恵と努力を、傾けなければなりません。中でも、従来の「物づくり」に加えて、ITなどの「ソフト」や「サービス」も含めた「モノづくり」によって、「国を興す」ことが何よりも大切だと思います。”という大和田さんの意図を伺い、心ない「乱雑な物づくり」の悪習が、いつの間にか心ある「モノづくり」の大切さを忘れてしまっている様な現在に、あらためて大事な本を出して頂いたと思いました。そして、多くの記録や文献を引照されながら、徹底した現場主義を貫かれたご自身の「体験や学び」を親しみ易く書いておられるのですから、教えられるところも大変多く、そうさうだと同感させられます。

なお、大和田さんは、公職としても、蔵前工業会理事長、日本工具工業会理事長、日本ベアリング工業会会長、富山県経営者協会会長、日本プラントメンテナンス協会会長などを歴任され、現在もご用の多い日々ですが、本会のセミナーを始め諸集會にしばしば参加され、共に学ぶ場で貴重なご意見を出されておられ、ご承知の会員も多いと思います。

今、各方面で講演を依頼され、益々ご多忙でございますが、本会でも別項 p20「掲示板」に予告のごとく、直接お話しを伺う計画が出来ました。ご参照ご参加下さい。

＝……………

24 号掲載

2000年9月26日(火)第10回分科集會 講演会

講演者本会相談役・元(株)不二越社長・工学博士 大和田国男氏

“技術屋社長の回顧録” [モノづくりよ永遠なれ]

本会相談役大和田国男氏より「モノづくりよ永遠なれ」と題してお話を伺いました。先生は1943年東京工大機械工学科卒業後、海軍技術将校として活躍され、戦後は46年(株)不二越に入社され、79年社長、93年相談役最高顧問、95年退任されましたが、この間蔵前工業会理事長、日本設備管理学会会長、日本プラントメンテナンス協会会長等、各種の機械、設備関係の工業会、協会の会長を歴任され、一貫して「モノづくり」に尽力され、79年には藍綬褒章を受賞されました。長年のご経験に基づく先生のお話は、「モノづくり」が先生の人生そのもので、今日迄の日本発展の原動力であったと同時に、今後も「モノづくり」が日本発展の中心であらねばならぬと強調されました。以下は先生のご紹介とお話の概要です。

1・生い立ち

先生の生家は東京板橋で研削砥石の工場を経営されていた。父君は良質の研削砥石の製造に没頭され、その後ろ姿を眺めて成長された先生は、すでに10才ぐらいの時には研削砥石に関する知識を持っておられた。このように先生は生来「モノづくり」を天職とするよう定められていたように思われる。府立化工、横浜高工を経て東京工大に入学された先生は、独創的な仕事をされた諸先輩について学ばれたが、創造的研究者としてあまたの発明をされた加藤与五郎先生を尊敬しておられた。その教訓は

- ・創造には直感がある
- ・直感の実験とハードトレーニングから生まれる
- ・直感を起こすのはピュアハート
- ・集中30分考えれば良いアイデアが生まれる
- ・創造には違った角度からの考えが必要
- ・人間は感謝の気持と道義心が大切である

先生は海軍技術委託学生となり、卒業後は徹底した海軍士官の躰教育を受け、更にネイビースピリットが植えつけられた。

- ・指揮官先頭・5分前準備完了
- ・最後まで望みを捨てず ・常に次の行動準備
- ・指揮系統の遵守 ・責任感と決断力
- ・常に明るく ・厳しさの中に余裕を持つ
- ・簡潔明瞭 ・迅速、確実、静粛、清潔、整頓
- ・柔軟な頭脳 ・なさけ、おもしろ
- ・少数精鋭、適材適所

ここで学ばれた海軍精神はその後の先生の研究、開発・経営の哲学の基本であった。又海軍工廠では空用機銃の開発・

生産を担当されたが、これも後の「モノづくり」の基礎となったものと考えられる。

2・「モノづくり」と営業技術

先生は46年榊不二越入社後、50年東京の営業技術を担当された。その任務は・加工関係の工具・治具・測定器・工作機械の拡販と、品質情報・技術情報の発信、新商品開発の提案・JIS規格の原案作成・日科技連のQCリサーチグループへの参加。であった。このことより先生は科学的品質・製造・保守・経営管理への路を歩まれることとなった。

3・「モノづくり」と生産管理

先生は統計的品質管理(SQC)の必要性を痛感され、その導入に尽力された。58年技師長に就任されると、会社経営の基盤として総合的品質管理(TQC)の定着に尽力され、65年常務に就任されると、会社再建の為に、トヨタ生産方式・予防保全(TPM)を導入、自主的管理に努められた。社長就任後も常に陣頭指揮、製造現場の改善も完成し、品質の向上、新製品の開発も順調に進み、91年には念願のデミング賞を受賞した。これは常に陣頭に立ち現場優先、現場尊重の立場を一貫して通した大和田社長の努力の賜物であろう。

4・「モノづくり」と人

高度成長は、「モノづくり」の軽視、資源エネルギーの大量消費、日本人の心の荒廃をもたらした。しかしながら経済再生への道は「モノづくり」に有る。これからは地球との共生、世界・人類との共生を理念とし、環境問題を解決しながら、経済成長を図らねばならない。「モノづくり」を担う人材は、技術的知識を身に付け、基本に忠実な合理性を持ち、同時に人間性豊かな感性を合わせ持った人格が必要である。技術者は先端技術をはじめ、幅広い工学知識、奥深い専門知識を磨く必要がある。これら固有技術と品質管理・生産管理・設備管理を合わせ身に付けることが大切である。

これからは益々先端技術が発展するが、使用を誤れば人類を破滅に追い込むことにもなる「モノづくり」に携わる人は、倫理観に優れ、広い視野を持ち、感性豊かな、良心的な心の持ち主でなければならぬ。前記した加藤与五郎先生の教訓、ネーピースピリットは今後も通用する教訓であろう。これらの人々が「モノづくり」日本を再生して、日本の繁栄を持続する礎となることを願うものである。

常務理事 安達勝雄 記